

だ い あ ろ と く

東京彩人記

重い障害を負いながら一線で働き、社会を活性化する人々がいる。事故による脊髄損傷後、壮絶なりハビリを経て「車いすの看護師」として復職した榎田美知子さんは、1人で娘3人を育てながら、八王子市の地域包括支援センターなど医療や福祉、介護の現場を支えてきた。現場を退職した昨年、仲間と社団法人を新たに設立した榎田さんに、活動と想いを聞いた。

【野倉恵】

—社団法人でどんな活動をしていますか。
車いすの看護師、相談員として働きながら、重度障害者の介護者向けの研修や、車いす体験講座の講師をしてきました。広く経験を伝えるため、法人事業としてそうした研修や講座を行う準備を進めています。

—今までの経緯は。

岐阜県での病院勤務を経て育児に専念していた36歳の時、自宅の階段から落ちて下半身がまひしました。娘は7歳と4歳と1歳。病室で死にたいと思いつめた

私を引き戻したのは、携帯電話を奪い合って「お母さん」と電話を掛けてくる娘たちの声と「子どもさんに給食用ナプキンを作りませんか」という作業療法士の一言でした。家で子どもと暮らしたい一心で訓練に耐え、手動の車の運転を覚え、1年後に退院し離婚。「力を貸してください」と車いすで地域に出始めました。雪の日、長女の授業参観に行くのを諦めた私を、先生と長女が家まで迎えに来てくれたことも。やがて反抗期を迎えた娘たちは、車

社団法人を新設した「車いすの看護師」榎田 美知子さん(60)

いすの親も容赦しませんでしたが、私は車いすから飛びかかって抱きつき、体で訴えを受け止めました。

—そして復職した。

介護支援専門員の試験に合格し、岐阜県の病院の事業所でお年寄りのケアプランを作成しました。2002年に家族で上京し、八王子市障害者療育センターに看護師として勤務。お子さんが私と同じ重度障害者だ

からか、長年の苦悩を吐露する高齢の親御さんもいました。長時間の車いす使用による体調悪化で退職しましたが、この後、体に負担のかわりに車いすの交付が認められました。

11年からは市の地域包括支援センターで相談員に。

地域のお年寄りの相談や見守りネットワーク構築、介護予防にも携わりました。車いすからの発信も

されています。市内の中学校などで車いす体験授業を手伝い、高尾山のケーブルカー駅や茶店で実現した電動車いす用充電器の設置にも関わりました。バッテリーの消耗が早い山上の坂道で困った私の声を、地元地区社会福祉協議会が受け止めてくれました。この地域とのつながりが力の源です。

—経験から伝えていき

たいことは。絶望から始めたりハビリでしたが、看護師として目を見開かされる経験も多くありました。何に向かうかが明確な自立支援や介護につながれば、重いハンディを負っても、人生は広く深くなることもあります。

介護者向けの講座は、私の体で伝えます。車いすから浴槽へ移す時、落ちないように足を下から持ち上げるなど、介助される側の状況を看護師の視点で説明できます。就職活動中の若者や退職者にも知ってもらい、壁のない社会の実現につなげたいと思います。

ハンデ イ が 深 め た 人 生



くしだ・みちこ 1957年、岐阜県生まれ。78年から岐阜大医学部付属病院などで看護師として働く。93年に自宅の階段から転落して脊髄を損傷。八王子市障害者療育センターを経て2011年、同市地域包括支援センターに勤務。17年に退職し社団法人「Smile Again」代表理事。

記者の一言

立位で上体を動かせる立ち上がり機能付き車いす。榎田さんはその交付が都に認められた先駆者だ。重い現実と向き合い続けてきたからこそ、ハンディのある人や認知症のお年寄り、家族や地域の人々が心を開いたのだろう。成人して巣立った娘さん3人の存在が、それを物語るように思う。

第90回記念選抜高校野球大会(毎日新聞社、日本高校野球連盟主催)で、部

のチームで特に仲が良い

(小倉監)

プロ野球選手から基礎を学ぶ参加指ツ手なの願っ 盟今リブ迎】